オリーブの樹

第95号
2010年1月31日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！

目次

Ｐ　２　一月の歌　　重信房子
Ｐ　３　独居より　　重信房子
Ｐ１３　重信さんとの交流コーナー
Ｐ１４　アラブ物語（７）ーリッダ闘争への道（５）
ーＰＦＬＰとの矛盾ー７３年ドバイ闘争の時代（１）

重信房子さんを支える会

一月の歌

重信　房子

陽の届かぬ獄舎外のさざんかに射す初日の出に元旦祈る

届き来し賀状に息吹く想い満ち元旦の房暖まりきぬ

就寝のチャイムの減灯独房に強き光の月のぼりゆく

初面会会いたい人が訪れて小さき天使はガラス越しのキス

スイトピーの甘い香りの独房で受信の数々読みふける夜

スイトピー春の印が小寒の房に届きて紅茶を一杯

ガザ封鎖見つめられつつ見捨てられパレスチナまた年あらたまる

墓の下ラッパ水仙今ごろは咲きそろいたるか友の屍の上

地中海冬の満月波の華故里の歌零れる正月

独居より　1月1日－1月20日

「沖縄」に助けられて進もう！　基地も「安保」もいらない！

重信　房子

1月1日　あかつきの光集めて冬木立
変革の新年序々に華やぐ

２０１０年、政権交代後初めての新しい年を迎えています。

政権交代によって、昨年は民主党ら三党連立政権が、情報公開を要に「密約」「記者クラブ問題」「事業仕分け」と、各分野で為してきたことは、日本の国家改造のこれからに役立つ一歩でした。

マスコミは「決断できない首相」「二重権力」「小沢支配」と叩きながら、年を越えました。

普天間基地移転問題では、米国の戦略に楯突くことに米国は不快を示し、朝日新聞は米国民主党のような論調で鳩山政権を危ぶみ、批判しています。新年はこうした「常識」一般論は止めにしたいものです。日米安保５０年の今年、沖縄住民の基地反対の声に助けられて、米国から自立する日本へと転換する新年です。

また、鳩山・小沢の資金をめぐって、暴露されてきたことは、自民党以来の日本の政治の仕組みである資金のあり方を断ち切れずにいることを、国民の目に示すものでした。いくら税金で政党助成金を莫大に支出しても、また、膨大な議員手当てを税金から給与しても、政党の指導者の立場に立とうとしたら、その上にとんでもない金がかかるという実例が示されています。自民党がこれまでやってきた日本政治の氷山の一角でしょう。それがなぜ今焦点化されるのでしょう。権力はやろうとしたら、いつでも事件にできる好例です。

大晦日の新聞では、小沢元秘書の取調べから、新年には小沢幹事長へとターゲットを進める様子です。それでも、この背後にはもっと本質的な攻防があると思います。「日本の政治進路を決定するのは、官僚ではなく、国民に選ばれた政治家だ」とする民主党を中心とした政治路線と、明治以来の国家権力として「正義」を独占してきた官僚が激しく暗闘を続けているはずです。

天皇と中国の副国家主席の会見をめぐる羽毛田官僚発言も共通しています。羽毛田長官が、もし本当に「天皇のため」を考えるなら、要求に応じてから記者会見で暴露するのではなく、首をかけてノーと貫くはずでしょう。

年末になって、鳩山首相の資金問題は「上申書」で済ませました。自分たち一家の金を多く使ったといって、首相を起訴することはできなかったのでしょう。

一方、小沢幹事長に対しては、他人の金を掠めたか、税金がぐるりと回ったかと、検察との厳しい対決が新年予想されますが、やはり国家観を異にする激しい路線対決と思えます。官僚中枢の検察は、喰うか喰われるかの思いで、小沢逮捕をめざしたいところです。元秘書らを取り調べ拘束して、事件のネタや証拠をマッチポンプで、検察は作り上げるでしょう。

私自身やられたので分かります。検察のストーリーに合うように事件化するために、逮捕の後で証拠を作り上げるというやり方です。まったく異常でした。狙ったら弱そうな人を強請って、偽りの供述書を無理やり作るのです。高級取り安泰の世間知らずの裁判官は「検察の正義」におもねるばかりです。検察の起訴有罪率９９％以上というのは、柔らかい独裁警察国家です。

民主主義を建前として、国民に選ばれた政治家による国家改造を求める民主党と、「正義」を独占してきた検察を中枢とする官僚の決定権、既得権益をゆるがせにはさせないという激しい攻防があちこちで広がる新年です。

選挙で国民から信を問われることのない官僚が無能な政治家に教え込み、振り付けしてきた自民党と癒着した国家運営時代は終わっています。過去、官僚権力に相容れないものを逮捕したり、スキャンダルで追い落としてきた、これまでの攻防のようには進まないでしょう。国民から監視される「情報公開」の「公正さ」のシステムが進めば進むほど、鳩山の次は小沢と、検察が次々に権威を落とし込めても、官僚支配そのものが立ち行かない国家改造の時であることには変わりありません。官僚が昔のように時代に応えていないからです。この流れは止まらないでしょう。官僚自身の中からも、出世や保身の変わり身や、あるいは稀に良心ゆえにも、政治主導を国の王道とすべきだという力も育ってゆくに違いありません。そこから日本は変わるでしょう。

今年は日米安保５０年です。沖縄の基地の闘いに助けられて、これまでの日本のあり方、日米同盟含めて変えていかねばという新年です。

死刑停止にはじまり、国際人権基準のレベルに沿っ

た司法改革も、その中で少しずつ改善されるでしょうか。昨年は、宮城刑、栃木刑など、逆に管理統制強化、人権侵害が増えたことが報告されています。

今の民主党の国民主権の路線が１０年続いたら、その頃には、司法も少しはましになるかもしれないと、弁護士は期待せず望みをもって語っていました。すぐには検察ら司法当局の思考方法も変わらないでしょうけれど、日本の変革の流れに照応して、「改悪」でなく「改善」へとベクトルが変化することを願っています。すでに２０年以上の無期刑受刑者は即釈放し、受刑者だって、もっと自由に手紙や面会ができて当然の世界の基準に変革してほしいものです。

私の東拘での年越しは９回目となりました。２０００年１１月８日逮捕後の年越しは、警視庁で何の変化もない一日でした。同房の中国人、韓国人、ビルマ人や日本人と、カウントダウン ハイタッチ イエー！と騒いだ程度です。２００１年以来の東拘の年越しは、年越しそばに新年はお節料理、そして３が日は麦入り膳でなく、白米となります。そして、一日１回お餅も出ます。

今年も東拘の年越しは年末年始の休み中に食べるビスケットなどのお菓子一袋と、大晦日には年越しそばが夕食時に配られました。

大晦日だけはラジオを就寝時間の９時になっても消しません。NHK紅白の中継放送を流し、行く年来る年の１２時新年の時報を聞いてからラジオが消されます。

今年も、年越しそばを食べながら、紅白を聞いていました。紅白では、前評判のスーザン・ボイルはあっけなく、マイクのせいか音量も遠かったのが残念。また、日本の７０～８０年代を知らない私ですが、アリスの「チャンピオン」と矢沢永吉の歌が良かったな……と聞きました。でも、NHK紅白に、若い昔の時代のような親密感はありません。昔、日本にいた時には、どんなに多忙でもNHKの紅白前に実家に帰り、家族とこたつの中で紅白を見て、一家揃って新年を迎えたものです。昨日大晦日は２００９年の締めくくりの短歌を作りながらのひと時です。

獄窓に十六夜の月眺めつつ
紅白を聞く年の瀬となる

１２月下旬に転房引越しがあり、前に居た房に戻ってきました。ちょうど転房した午後、ルーバーの隙間の青空に、レースのような上弦の月が輝いているのを発見。以来、新聞の月の出入りの時間に合わせて、月見ができるようになっています。１２月３０日は、美しい満月を見ましたが、大晦日の紅白には、ちょうど獄窓の隙間から、十六夜の月が美しく渡っていく時でした。去年のカレンダーでは、大晦日は十六夜、満月は３０日となっています。でも新しく届いた今年のカレンダーは、元旦が満月。２回満月……！それもいいもんです。

紅白歌合戦も終わり、行く年来る年のお寺の鐘の音から新年の時報の頃には、もう月は見えません。それでも、明るい夜空に向かって歌を歌います。まず、インターナショナルに、愛の賛歌。ワルシャワ労働歌に、またインターナショナル。それに、２日前に届いた明大ＯＢ会の友人の追悼の文の扉にあった歌も。この歌は、１９６０年代、私が明大に入学した時、反日共系の先輩たちが新入生を歓迎して、よく歌ってくれた歌です。１年生の夏の合宿の山中湖に林間学校の気分で行った私たち新入生に、「国家と革命」「共産党宣言」の学習会がはじまったことがあります。「学習会反対！ここまで来て、なんで閉じこもって本を読むのか？自転車、水泳、親睦の行動を！」と、学習会の意義のわからない私らが、学習会をぶち壊した時の記念の歌でもあります。学習会を止めて、人生を語り合い、泳ぎ、歌いました。夜には焚き火を囲んで、先輩たちがこの歌を躍りながら歌う迫力に、歌と一体になった「革命家」の一面の本音の姿を見ました。日共系の友人は、トロツキストの本性の歌と軽蔑して、私を民青にオルグしていましたけど。

その時の歌というのがこんな歌詞です。映画「真田風雲録」の中の「真田隊マーチ」というのだそうです。

ワ、ワ、ワ、ズンパパー！
織田信長の歌いけり
人間わずか五十年
夢まぼろしの如くなり
かどうだか知っちゃあいないけど
やりてえことをやりてえな
てんでかっこよく死にてえな
人間わずか五十年
てんでかっこよく死にてえな

ワ、ワ、ワ、ズンパパー！
異国の聖のたまいぬ
見よや野のゆり空の鳥
明日は明日の風が吹く
かどうだか知っちゃあいないけど
生きてる気分になりてえな
てんで粋がって生きてえな
明日は明日の風が吹く
てんで粋がって生きてえな

「６０年安保のブントの国会突入を彷彿させる詩で、当時の反日共系学生の愛唱歌でした。ルーツは学生運動の『先駆性理論』一点突破全面展開の流れです」と（注）が歌詞の後に添えられています。当時のええかっこしいの悲哀を歌に託した時代を思い出します。

歌っているうちに、もっと前の時代の戦前の革命歌というのを思い出して歌ってみました。これは、故上田等さんがアラブの仲間に教えてくれたものです。でも、全部は思い出せません。断片ですが。

天はゆるさじ良民の
自由を無視する圧政を……
暴には暴もて報いよと
ダイナマイトを振りかざし……
六十余州に血はほとばしり
ここに立ちたるテロリスト……
千代田の城に赤旗立てて　共に祝わん大革命

という大杉栄たちの歌だそうです。

歌っているうちに「東京流れ者」の替え歌の「ブント流れ者」も思い出しつつ歌ってみました。「楽しく」闘った６８年までの歌ですけど。

１、ガリ切ってビラ撒いて１年生
　アジってオルグって２年生
　肩書き並べて３年生
　デモでパクられ４年生
　ああ、悲しき活動家　ブント物語
２、勉強する気で入ったが
　行ったところが自治会で
　マルクス レーニン アジられて
　デモに行ったが運の尽き
　ああ、悲しき１年生　ブント物語
３、デモで会う子に片思い
　今日も来るかと出かけたら
　今日の彼女は二人ずれ
　ヤケでなったよ委員長
　ああ、わびしき３年生　ブント物語
４、卒業間近で日和ろうと
　心の底では思えども
　最後のデモでパクられて
　卒論書けずにもう一年
　ああ、悲しき４年生　ブント物語

こんな歌でした。活動家の歌はニヒリズムと求愛と悲哀の本音が込められています。アラブ時代はよくアラブの仲間たちともパーティをしたり、歌を歌いました。パレスチナの人々は、民族の歌からそのリズムに合わせて、次々と即興の歌詞をつけて歌います。時事やアイロニーや居合わせた人を歌ったりと、歌詞に取り込んで次々に歌いまわしていったり、とでもうまいのです。私たち日本人は闘いの歌としては多くありません。「民族独立行動隊」や「がんばろう」などからソーラン節まで、たくましい歌を対抗して歌ったり、さらに作ったりしたものです。私たちの作った歌にも力強い歌もあります。「団結数え歌」とか。その歌も歌いました。

一つ　人は誰でもみな同じ
二つ　不信を乗り越えて
　　団結必勝がんばろうがんばろう
三つ　みんなで本音を出し合って
四つ　弱さを克服し
　　団結必勝がんばろうがんばろう
五つ　いつも思想点検し
六つ　無理な建前捨て
　　団結必勝がんばろうがんばろう
七つ　難局辛苦をものとせず
八つ　奴らに鉄槌を
　　団結実証がんばろうがんばろう
九つ　心と行為を一つにし
永久に続けよう革命を
　　団結必勝がんばろうがんばろう

私たちの生活はいつも明るい文化と楽しみがあったな、と思い返します。みんなで子育てしつつのせいかも知れないけれど。そんなことを思い返しつつ、たくさんの歌を歌いながら新年を迎えました。気持ちの良い朝。月は見えるのに、太陽は見えない位置なので、獄壁に反射する初日の出に向かって、「変革の新年、新しいことがはじまる新年おはよう！」と祈りました。

朝は、お節料理の一箱と紅白饅頭が朝食時に配られました。お節の箱は、２５cm×１５cm×高さ３cm です。小さな数の子とえびとブリの焼き魚にハンバーグ

や肉団子、なます、きんとん、羊羹などの詰め合わせの一箱です。年々お節料理の量も質も前年の方がましだったかなと思えるところありですが、元旦の飾られたお節料理は楽しいものです。

昼には、鶏のスープと小さな切り餅３ヶ。お雑煮のメニューなのでしょうが、がっかり。切り餅が冷めているせいもあり、粘り気なしの米紛とうどん粉の塊のようです。昔は、鏡餅のようにどんと皿に入っていて、ちぎれないほど粘り気のもち米の餅でした。今年のはもち米を少ししか使っていないようなもので、熱いスープや湯に戻して入れても、固くて食べられませんでした。

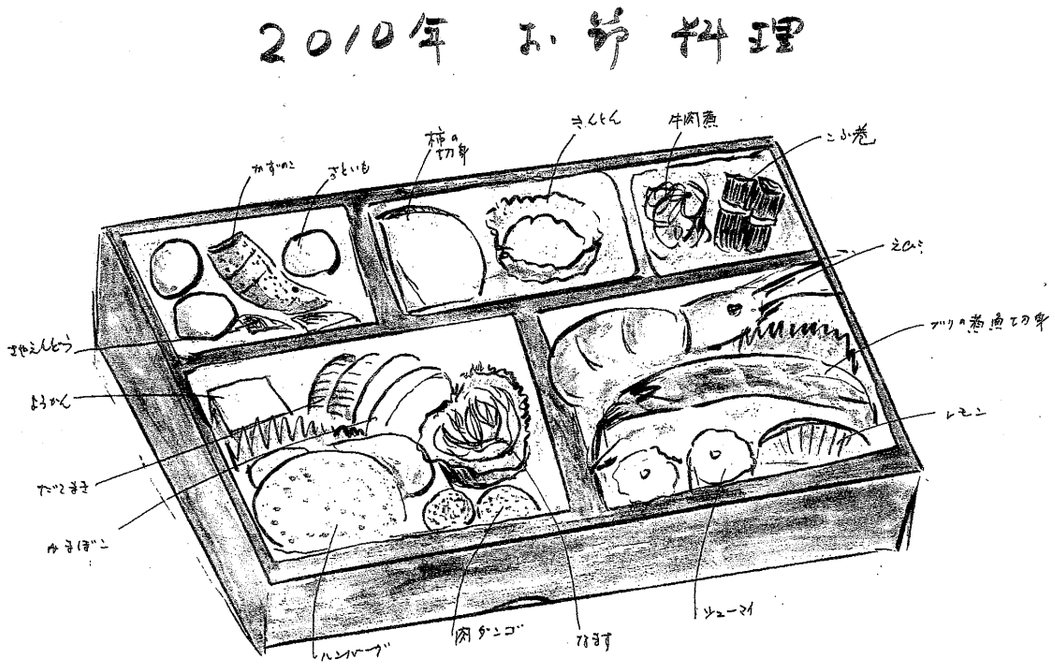
夜は牛丼パック。これが甘すぎるのと抗癌剤治療中で、肉を避けているので食べられません。胃のむかつきなどの副作用はなくなっているので、食欲はあります。お節の箱の食べ物や差し入れみかんや元旦から食べすぎです。

たくさんの賀状を受け取りました。みんなの顔を一人一人思い出しつつ読みながら、ゆったりとした午前中の正月元旦です。多くの方々から癌治療のいたわりと新年の判決を気遣う暖かい便り。ありがとうございます。

去年の仕事納めの１２月２８日と、その納めた後の２９日までかけて、２０冊の本がどっと差し入れ交付されました。そのうちでも分厚い『文芸春秋』に見る昭和史」１～３巻は面白くて本来やるべき房内処分整理なども止めて、年末は読書集中になってしまいました。大正天皇の死から昭和２０年までが第１巻で、５・１５や２・２６事件の当事者が語っていたり、第２巻には、宮本顕二の網走獄中記などもあります。第３巻には、７２年リッダ闘争後の「重信房子の父として」という父の一文も収録されていて、びっくりしました。父の一文を大晦日に改めて読み直して、父の娘への想いが当時よりも深く伝わってくるものがありました。

そして、元旦はその大量の本の中から小説「遥かなる水の音」（村山由佳著）を読みました。「僕が死んだらその灰をサハラに撒いてくれないか」と、パリで死んだ一人の日本人青年の遺した言葉に、同居人のゲイの中年フランス人、青年の姉、中学時代からの親友の男女が遺灰を抱えて、案内人の運転手のアラブ人とサハラへと旅する話しです。各々が信じるもの愛するものが違い、それぞれ自分の想いを胸に青年のための旅がはじまり、それが各々にとって己を問い返していく旅にもなっています。このサハラへと向かう旅のモロッコのフェズやマラケシュや街と社会と生活と風景のなつかしさや美しいアラブの姿が嬉しくなって、読みはじめてそのまま１冊夕方までに読み終えてしまいました。

こうして元旦はとても豊かなマグレブへの想い。そこから、やはり還るのはパレスチナへの想いです。どうしているかな、みんな……。



去年はガザへのイスラエルの攻撃の中で、迎えた新年でした。イスラエルの攻撃によって、１４１５人の死者、その数倍の負傷者を出しました。４１００の家屋の完全破壊、２万以上のシェルターも破壊され、約１０００家族は今もテント暮らしです。

それなのに、今もガザの制裁封鎖は解かれていません。オバマ大統領就任を経ても、アメリカはイスラエルの犯罪に目をつぶり、結局これまでと同じ、イスラエルの入植地拡大を許し、一方的にパレスチナに譲歩の交渉を強いています。オバマ大統領は、プラハでの核をめぐる宣言でノーベル平和賞を受けたことで、平和賞は戦争のゴーサインでもあるかのように戦争政策を深めています。

また、エマニュエル首席補佐官の父親が、自分の息子はオバマにイスラエル寄りの影響を与えると言ったように、今のところアメリカの中東政策はイスラエルの意のまま。

新年、パレスチナの希望は遠のいたまま、パレスチナ大統領選も議会選挙も未定です。制裁の解除をなぜしないのか？！ 少なくともエジプト側ラファ国境の自由往来を！ パレスチナを想うと怒りが湧きます。初怒り……の新年だな、と自分で思い、笑いました。

でも、‘０８・１２・２７からはじまった去年のガザ攻撃に抗議し、パレスチナに連帯して、４５ヵ国から千人以上の人がガザへと新年結集をめざして行動していました。パレスチナは新年連帯の祭典となったでしょうか。

１月２日　駅伝の実況中継獄舎にも往路五区より熱気伝わる

今日は例年どおり新聞の休刊日。新聞がないと、なんとなく手持ち無沙汰です。昨日につづいて、賀状たくさん届きました。ありがとうございます。年末休みからずっと読書にはまっていますが、今日も昭和の初期から戦後、松川事件当事者の主張などの歴史物と、それに宮崎先生の巻頭言の載っている「人権と私」（人権文化を育てる会編）、「シークレットパワー国際盗聴網エシエロンとＵＫＵＳＡ同盟の闇」（ニッチー・バーガー著。エシエロン盗聴と情報操作をはじめて明らかにした本で、２００３年翻訳された）「小沢一郎嫌われる伝説」（渡辺乾介著）など、次々と熱中して読んでいます。荷物整理としても、年末からたまっている本を次々と読まなければという気分と、面白くてはまっている気分半々です。

今日の正月料理は、昼には年１回の刺身。カジキマグロ５切れといかそうめんの盛り合わせパックにわさび醤油付き。わかめと天草などの生鮮海藻サラダにドレッシング付き。それにスープ。生ものの刺身や海藻は嬉しく、おいしく食べました。

昼食後のニュースに続いて１２時１５分から駅伝中継がはじまりました。すでにラジオは４区の終わりの方を中継していて、明大がずっと一番で、１区から４区まで走ってきたとラジオから聞こえて、びっくり。昔から明大そんなに強かったことないのに……と。去年５区を走った注目の柏原選手がバトンを受け取って次々と抜き去り十数キロ地点で、明大を抜いてしまいました。もう独走に入って５区を制して東洋大往路優勝を飾るところまでずっと中継していました。去年もこの柏原選手の勢いで勝利したし、すごいもんだなあと感心しつつ、また読書を楽しみました。

夕食は、お汁粉と切り餅３ヶ、いかと野菜和え、コーヒーゼリーなどでした。

ちょうど届いた夕方のお便りの中に、旧友が前立腺癌から大腿骨に転移しモルヒネ治療中、後５年も生きられればもうけものという覚悟で生きているとあり、びっくり。私が外に出たら、一緒にブントを再建しようと言い合っていたのに……。私が健康で出てくるのは、十数年先だろうから「もう、その頃には自分は地獄で閻魔大王の裁きにあっていること請け合いです」とのこと。返す言葉もないほどびっくり。能力もあって、これから教訓を若い人にも返していける人なのに。ちょっと待って……！まだいろいろやろうよ……と言いつつ、自分も含めて定命の中で、より人々に教訓や記録を返しながら精一杯生きていくしかないな……と、思い至り寂しい気持ちになってしまいました。

夜、ちょうど就寝のチャイムと共に消灯となったので、窓の外を見ると、すごい強い光の丸い月。居待月の２日です。月が獄窓のルーバーの隙間をちょうど登っていくところです。光の強い満月のような月に見とれつつ、友人のことを考えていました。

１月３日　せかされる如く過ごした正月の一人相撲を振り返る夜

図書整理の如く、急ぎながら集中して読書に明け暮れているうちに、もう正月三が日は終わりの日。明日から、東拘も仕事初めで業務展開となり、初発信も可能です。午前中は仕事の準備をしたのですが、１０時から駅伝復路のラジオ放送がはじまりました。やはり駅伝中継が面白いので、聞きながら荷物整理の仕事に

切り替えてしまいました。受信物などの整理や明日の宅下げ宅急便の準備をしながら、昼食を挟んで、駅伝中継を聞いていました。駅伝中継は１０時から１１時、１２時１５分から終わりまでです。明治はシード権をやっと獲得した１０位。それでもよくがんばっていました。昔、学園祭などで共同して、協力し合った応援団に頼まれて、二部の研究部連絡会からも神宮の六大学野球の応援にも何度か駆けつけて、「白雲なびく駿河台～おお明治～」とやっていたので、出身校に注目してしまいます。でも、東洋大も駒大も城西も青学も、みな感動的でした。

昼食は、車えび、カボチャ、さつまいもの天ぷら一つずつ。大根おろしと天つゆのパック付です。夕食はあべかわ餅とナスと鶏肉の煮込みなどでした。

午後は、明日の投函のための賀状の返事などの準備や、読み終えた本の冊子小包のための整理。また１２月までの２００９年の短歌の整理など、あれこれ仕事バージョンに頭を切り替えての作業に集中です。

新聞は、去年来の検察の動きから、小沢幹事長を尋問しようとする動きと同時に、元旦の鳩山首相と小沢幹事長の対照的な動きを伝えています。元旦、鳩山首相は渋谷の「公設派遣村」を視察し、一方小沢氏は都内私邸で新年会を開き、過去最高の１６６人の議員が集まったと伝えています。民主党としては、夏の参議院選にむけた党のシフトを取るのは当然です。強権的手法の自己主張型の小沢さんの信念の表出の仕方と、気遣いつつ粘り腰の合意を積み重ねていこうとする鳩山さんのやり方が、元旦から違った新年を迎えています。

三党政権合意を支持した私も、多くの国民同様、鳩山「資金問題」には呆れ、指導力には不満を持ちます。しかし、それでもやはり民主党に国民の期待が残っているのは、これまでの自民党政治が余りにひどかったからです。「密約」「事業仕分け」含めて知りたいという国民の要求があります。バラバラ発言とか、ぶれるとか言われながら、これまで三党合意であることで健全さを保ってきた内閣です。「ぶれても折れない」と言われる粘り腰の鳩山政治が、去年９月首相として初の演説で、訴えたことをどう貫けるのでしょう。

閉じ込められて、去年から運動房にも出られないけど、今年は月が見えるのがいい。それに、ルーバーの遠くに真っ赤な花が点々と緑の中に。あ、あそこにさざんかが咲いているのかなと、ほんの隙間の冬景色を楽しんでいます。

１月４日　仕事始め決意を封書に閉じ込めて
初発信の東京拘置所

今日は仕事始めです。係りの人々にも今年もよろしくと挨拶。朝食後すぐに順番で一番風呂。８時２０分から８時４０分まで。湯船に静かに沈んで、手術痕を眺めています。一昨年の仕事納めが腺癌の告知だったので、去年の年の初めには心配して家族や友人たちが来てくれたな……。手術してもう１１ヵ月もたったのだな……と、改めて身体は正常化しているのを実感。本当に人間の身体というのは、切ったり縫ったり平気なものだな……と考えつつの一番風呂です。

風呂から出て、発信物の手続や願事の書き込み作業。明後日の１月６日に抗癌剤の第３クールの投薬が終わり、休薬に入ります。そのために、明後日には採血検尿があり、腫瘍マーカーのチェックが行われます。そこで、今日医務部長宛てに「６日の採血の時に、カロチンとビタミンＡの障害がないか調べてほしい」と、願い書を書くことにしました。第３クールの１２月の初めから、指先が固く、アカギレのようになってしまうのと、鶏目のように夜は文字が見にくくなっています。涙目も副作用のせいか、また、ただの加齢のせいなのかも知れないのですが、小腸が癌だったので、小腸のビタミンＡの吸収に問題あるのかな……と、検査の折にこれらの検査を付け加えてほしい旨、書いたものです。癌発見から１年間の治療のお礼の挨拶と共に。

その合間に９時過ぎから運動房へ。曇り空のため、今日も初日の出は見えません。３ヵ月は晴天ながら太陽そのものが見える房ではないし、今日は曇り空です。プランターのマリーゴールドは元気に年を越えて蕾もまた新しく黄色の花をつけています。小さな千両の木２本と、小さな梅の木の入った７０センチほどのプランターは土が不足なのか、千両の葉の緑色が白っぽくなって元気がありません。赤い実も付けませんでした。梅の小枝には新芽のガクが出てきているので、枯れてはいないようですが、千両は冬の赤い実を楽しみにしていたのに残念。じっと見つめつつ、時は新しいものを生み出すことを思います。

戻ってすぐにみどり一家の面会。楽しい話し。家族の表情。幸せな新年おめでとう。新年は東拘の面会人が多いとかで、午前中の面会なのに、たった８分です。でも、新しい年を良いものに過ごしていこうと挨拶して別れました。

房に戻ると、すぐ昼食。昼休み明けには、去年仕事納めの日のメイの面会時に差し入れてくれた大福やみかんなどが届きました。また、去年届くはずだったハンギョレ新聞の週刊誌「２１」の記事の翻訳や私の出した賀状への返信なども受け取りました。

あっという間の一日。休み明けはいつも新聞を読む間もなく、一日が過ぎてしまい、夕方になってやっと新聞をめくります。今日の仕事初めは首相の年頭会見のある日です。「情報公開」を柱に、国民の声に耳を傾けつつ、不況と自民党のデタラメの後始末からはじめている鳩山政権には、三党合意を基礎に踏ん張ってほしいところです。前政権の日米合意にもとづく普天間移転をイエスと言わず、年を越したことで、沖縄の基地移転反対の声もさらに大きくなるでしょう。

１月５日　青空を見上げて背伸びしこぶし上げ
ウォーと叫びて友に連帯

今日は去年から今年初めの青空の見える運動房へ。運動する所は独房と同じ大きさで、小さい空間に過ぎないのです。でもベランダの房は空が金網になっているので、月２回、女区の長期拘留者にのみ日光浴を兼ねて運動させるための房です。通常の房は天井も壁もコンクリートで設計が悪く、日光が入らないのです。そのため視察委員会の要請の一つとして、２年前から実現した青天井房です。今日は青空に雲がもくもくと出ていて気持ちが良い朝。ひやりと冷たい床に座って初の爪きり。

房に戻って、昨日の首相の会見の記事を読みました。沖縄普天間飛行場の移設問題については、「期限を区切って結論を出すことを約束した」と、５月までに結論を出すとの記事。

すでに去年結論を出さなかったという現実において、「沖縄県内」という選択肢は断念すべきです。そして、５月までとせず、日本の今後の国際路線にもとづいて、日米同盟を問い返す時です。こうして、位置付けた全体から駐留の縮小こそ、再検討されるべきでしょう。６０年安保から半世紀。余りに主権を譲り渡してきた日米安保が未来永劫許されるはずもありません。基地があること自体が異常なのに、「異常」と感じない「日常性」になっている日本はとてもいびつな国です。

「対等な関係」を言うなら、何よりも日本のことは日本政府が決めるという自主独立した関係へとまず作らなければ、成り立ちません。自民党時代から占領下の延長上の日米関係に陥っており、「対等」以前の問題です。米国を怒らせず、気に入られようとばかりする日本側の奴隷的根性はもう止めにしたいものです。

民主党の政権交代以降の段取りはうまく進みきれませんでした。不況と自民党政権が官僚と米国依存で政治家の利権を企業優先で日本社会を破壊してきた結果を引き継いだのですから、すぐにうまくいかないのは当然でしょう。

「情報公開」を要に、国民の側からの国の改造を求めて進む限り、米国ともぶつかるし、官僚とも暗闘が広がるでしょう。また、既得権をめぐる妨害も引きつづくのは当然です。

小沢・鳩山両氏とも正面突破の路線で進んでいるので、考え方がどんどんあぶり出されています。新聞によると、今日の新年所信演説で、首相は「百年に一度と覚悟を決めている」と述べています。現在の内閣のままやりきること、政治主導の実現をめざすと表明しています。外交においては、「日米安全保障条約締結５０年の大きな年をチャンスとして活用したい。言うべきことを言いながら、信頼関係を高めていく。重層的な形で、日米同盟を進化させるのが大事だ」と述べています。「進化させる」ためには「安全保障条約５０年」の「総括」として、長期的な展望のもとにまず、アメリカではなく、日本内の政治方針として期限を区切らず決定されるべきでしょう。

また、憲法改正には踏み込んではいませんが、党の仕事として触れています。憲法を守るべき内閣が改正を叫ぶ安倍元首相のような愚は犯していません。しかし、安保の「見直し」を問わずに憲法改正に触れているのは危険です。なぜなら、これから「密約」の調査結果が報告され、「核持込み」を許していた日本の自民党政府に代わって、鳩山内閣は、どういう日米関係として、どう決断するのか問われているからです。三党連立政権は、非核三原則を断固として守るのでしょうか。「国と国との約束だから」という今の普天間移転の論理と同じく、「密約」をただ「公に認める」という方向に向かう危険をも感じます。

「情報公開」「国民主権」「地域主権」など、三党連立の持っているプラスの側面を支持し、国民、市民の運動の側の監視・批判の力を増大させて、日本の改革をもっともっと徹底してほしいものです。

夕方、手紙や葉書が届くと、外界との繋がりを実感できて嬉しい。

１月６日　白胡蝶カサブランカにスイトピー
初花届きて匂い満つ房

今日は第３クールの抗癌剤服用の終了日です。明日から２週間がまた休薬期間になります。朝食をとらずに、採血を待ちます。９時過ぎに看護師が来て、採血。「医務部長への願箋を私も読みました。今日はビタミ

ンAの検査も加えることにしました。カロチンの検査は東拘ではできないので、ビタミンAの検査のみ加えています。それにもともとの予定の腫瘍マーカーと、高血脂症のチェックを今回はやります」とのことです。採血前の血圧はなぜか１４７と高い。昨夜から採血のため飲食をとっていないせいか？腕を肩の高さにして計り直したら、１２３と５９で、OKとのこと。

採血の後、遅れて朝食。野菜ジュースを飲んで、９時半過ぎに運動房へ。

房に戻ると、去年差し入れられた資料が届いています。「９条改正阻止の会」の資料に遺言状を書いて、遺産の一部でも運動へ献金し、松下政経塾に対抗して進歩派の人々が人材を育てる場を作ろうと言うことらしい。なかなかユニークなアイデアです。私には献ずる遺産はないけれど、こうした企画はうれしいものです。

また、ちょうど本も届きました。一つは「情況」出版初の新書版。「登紀子１９６８を語る」という本。「情況」も現実の変革に役立つ社会とかかわりのあるものになってほしいと思っていますが、この本はいい。若い人も読みやすい。登紀子さんがあの６０年代を現役大学生に語っている対話と、終わりに上野千鶴子さんとの対談の収録された新書版です。

７０年代には連赤、内ゲバなど、悲惨なことが多かったけれど、６８年までの学生運動と歌の輝きの日々を語っています。「１９６８年を挫折や敗北として思い出すのではなく、スタートだと思うことにした」という立場から語られています。上野さんはそれには批判的に、１９６８年も６９年もずっとつづいていた現実であったことを提起しています。なかなか楽しく面白いです。

登紀子さんは５０年前中学時代からの友人で、６０年代は明大の学生会館でも語り合い、当時のブント仲間もよく知っています。藤本さんの初対面の時の一目ぼれや、あれこれもいろいろあった旧友でした。当時、彼女は問題意識をもって学生運動にも関わりたいし、歌も歌いたいと悩みつつ共に身近に暮らした時代を思い出します。私の環境の変化と彼女の立場と条件から、語ることはなくなってしまいました。当時を思いつつ、本を読みました。

また、もう一つの本は、友人が出版などに関わったので、送ってくれたものです。「村長ありき」という感動的な本です。「生命に格差はない」と、生命の尊厳に貫かれた村政を成した岩手県沢内村の深沢村長の軌跡を記した本です。深沢村長は１９０５年生まれで、戦前は上海銀行や台湾総督府、満州拓殖公社に勤めました。１９４５年の日本敗戦時、中国人に取り巻かれ、糾弾され、人民裁判を受け、帰国も危ぶまれました。しかし、彼がいつも中国人には良くしたという老いた中国人の証言で、帰国を許されます。

４６年、中国から村に帰ってきました。外に向かっていた力を生まれ故郷で尽くしはじめ、教育委員長から推されて１９５７年に沢内村村長となりました。そして、貧しく冬は雪に閉ざされて病院もない、この村の村民の命と暮らしを重視した住民本意の行政に目覚めます。それに村民も呼応していきます。当時の村民は約６０００人です。

まず、村長になって医療の機会を保証するために、冬雪に埋もれる村をブルドーザーの雪かきから道路の確保。６０年には、国保１０割給付で６５歳以上の医療無料化を実現し、６１年にはそれを６０歳以上に引き下げ、また１歳未満の乳児の医療も無料化を成し遂げます。県や国から１０割給付は「国民健康保険法違反」と指摘されます。

村長は「村民の命を守るため、少なくとも憲法違反にはならない。国や県がやらないから、村がやるんです。国は後から付いて来ますよ」と、憲法２５条を楯にして、全国最悪の乳児死亡率のこの村が、死亡率ゼロの記録を残しました。村政の目標は村人が「健やかに生まれ、健やかに育ち、健やかに老いる」ことであり、その実現のために誰でも（どんな貧乏人でも）いつでも（２４時間、３６５日、生涯にわたって）学術の進歩に即応する最高の包括医療サービスと文化的健康生活の保障を享受すべしとして、それを実現していったという貧しい村の豊かな物語です。

この村長の話しは、「いのちの山河 日本の青空Ⅱ」として映画化されて、上映運動がはじまるようです。

この沢内村の人々と共通して思い出されるのは、パレスチナの厳しく貧しい環境の中で、無料医療を実現しようとしていた人々です。ＰＬＯやＰＦＬＰの人々がボランティアの医者や看護婦をキャンプに配置し、レバノン村民をも巡回診察していた昔の戦場を思い出します。「命は平等」と外国人ボランティアとパレスチナの人々が戦場をかいくぐって努力していた真剣な誠実さと、この日本の辺境で尽力した豊かな先進性には、共通して過酷な条件の中で、命の大切さを実現する力が生まれている気がします。

日本が今、６０歳以上の人々の医療を無料化し、１歳未満の乳児の医療も無料に全国化したらどうでしょう？「財源が破綻」すると考える思考方法を取っ払うべきです。個々の国民が頼るものもなく、先行き不安で、虎の子を抱えていたり、精神・神経をすり減らしている生き方から転換したら、まったく違って内需は大いに拡大し、幸せ感も増すでしょう。国は、まず憲法２５条に沿って、国民に生命を保障する義務があります。そして、国民は文化的な最低限の生活を営む権利があります。まず、これこそが国の為すべきことで、日米同盟はその後の話しでしょう。逆立ちしてきた自民党の政治が唯一の政治パラダイムではありません。米国、大企業、官僚、政治家の利権・特権の依存関係から、国民の暮らしと命のための政治を本気で求め、現実の変革を促す新年としたいものです。

とてもよい本でした。早速、地を這うように地域を陣地として活動している友人に送ろうと思います。

１月７日　田おこしの畔に地を這うせりなずな
母と摘みしは七草の日の朝

今日から１月２０日まで休薬期間です。この頃は副作用も軽くなっています。目と指先などの異常はあっても、内臓ではないので、食欲は戻っています。抗癌剤を飲まないと、やはり食べるものもおいしいので、みかんや差し入れのものを食べ過ぎているこの頃です。

今日も資料や本「人民新聞」１２月号の他は「レコンキスタ」「解放」「図書新聞」などの新年号や「ごましお通信」などを受け取りました。差し入れの花はスイトピーにシンビジウムの大きなピンクの花。ありがとう。

「ごましお通信」（益永利明さんの救援誌）を読んでいたら、「綾瀬川沿いの拘置所の敷地（正確には元敷地というべきかな）に財務省が建設中の職員宿舎は、すでに拘置所より３階分も高くなっていて（１４階建ての計画？）舎房の採光や日照をさえぎっています」と、利明さんの便りが載っています。

そうですか、これは財務省の職員寮だったのですか。去年からＢ棟の空の見える部分が狭められるほど工事が進み、２棟の縦長のビルがどんどん高さを延ばして建設されていました。私の房からは２棟の頭の部分が見えます。こちらの敷地と鉄柵で区切っていますが、これは東拘の付属の建物とばかり思っていて、拘留者用病院でも作ったのかと思っていました。なんで財務省の寮なのかわかりませんが、国民の平均賃金よりも高すぎる保証されすぎた官僚・議員たちのことを考えてしまいます。

今年は政府の対応で、日比谷に派遣村は作られなかったけれど、施設に集まった人は、東京だけでも８００人とか。生活条件は不況でさらに悪化しています。かつてのシステムの手直しではなく、国家改造・作り直し「村長ありき」の深沢村長のような根本的な発想の転換はできないのでしょうか。外圧でもないと……。

七草粥。母と摘んだ田植えの土を返した畔に咲いていた、せり・なずな・はこべらを思い出す七日です。

１月９日　ルーバーの隙間の遠くにさざんかの
赤き光の鮮やかな午後

今日から１１日まで東拘は休み。

今日の新聞の「声」欄の投稿に沖縄の人々の思いが伝えられています。とてもよく分かります。

「沖縄になぜ基地押し付ける」というタイトルで沖縄６８歳の主婦の方です。「米軍普天間飛行場移転問題に関し、在日米軍の存在が他国からの攻撃に対する抑止力になると主張する方々が居ます。そういう方々は、ご自分の町に米軍基地を置き、守ってもらうのが一番と思いませんか。日米地位協定に守られている友好的な米兵が十分守ってくれると思います。沖縄には普天間以外にも基地が余っていますので、ご心配なく。～」とつづきます。「なぜ沖縄ですか。まだ沖縄の現実に目を背け続けるのですか。沖縄に基地を押し付ける人々に尋ねたいです」と結んでいます。

最早鳩山内閣は「沖縄県内」という選択肢は許されません。米国政府よりも日本国民の命と暮らしを政府がきっちりと確定してほしいものです。グアムでもどこでもどうぞ、日本は無理ですと宣言するべきですよ。米国は怒って基地を全部引き上げることなんてないのですから。引き上げてくれたら、万歳祝宴ですけれど。ただ、米国の意に服しない政治家には、日頃ＣＩＡ中心に身辺調査で弱点をつかんでいるので、政治生命を脅かす秘密情報やスキャンダルがさらに飛び出してくるかもしれませんけれど。

１月１２日　初雪とラジオ伝える房寒し
病棟の旧友思う夕暮れ

連休明け。本格的に新年が動き出すようです。友人から『普天間基地はいらない。新基地を許さない１・３０全国集会』が日比谷野外音楽堂で行われると、その様子を伝えてくれました。

「１月２４日の名護市長選で、基地移転反対派は勝利するでしょう。その力に本土の住民こそ目覚めが問われます。米国との関係のあり方、憲法から安保までを考える時です」とのこと。

一方で不況も深刻化し、また検察側の小沢幹事長へのターゲット化に向けた元秘書らへの調べは、年末か

らさらに強引に進みそうです。

パレスチナでは、去年のイスラエルによるガザ虐殺攻撃によって、約百十億ドルの被害だったと、パレスチナ自治政府は述べています。５億２百万ドルは、すぐ必要。さらに、６億ドルが要ると訴えています。去年３月、ガザ復興国際会議で４５０億ドルのガザ再建資金の供与を決めながら、一向に改善されていません。そればかりか、逆にイスラエルのネタニヤフ政権の入植地拡大や、イスラエル国会では、イスラエル人らの２つの政党に対して、「テロリストグループを支援した」という口実をもって、選挙への立候補を禁止したりしています。

これらは、イスラエル国籍を持つパレスチナ人同胞たちが、イスラエル軍の攻撃に対して、抗議に立ち上がった歴史的な行動に対する報復行為です。

イスラエルのユダヤ人の９４％は、ガザ攻撃に賛成し、イスラエルのデータでも、パレスチナ人の８５％がガザ攻撃に反対しているとのこと。

現在ガザ住民の８０％がUNRWA（国連パレスチナ救済機関）と、民間NGOに依存してしか生存し得ないで要るとのデータがあります。何よりもガザへの制裁封鎖解除なしには、事態は好転しません。

このガザに対する引きつづく封鎖に反対して、年末年始は、国際連帯行動が大きく激しく闘われています。２００８年１２月２７日にはじまった去年のガザ攻撃に対して、「ガザ フリーダム マーチ」が計画されたとのことです。世界４２カ国から、国会議員や有名無名の１３００人がカイロからガザに人道支援物資と共に入り、新年をガザ住民と共に過ごそうと計画したものです。エジプト政府は、１３００人ではなく、１００人しかガザ入りを認めないと、年末に声明を発表したり、緊張していました。

他の支援団体「ヴィヴァ パレスチナ コンボイ」は、医療品など支援物資を積んで２１０台のトラックで参加しています。欧州トルコを経て、ヨルダン、アカバからスエズへ入ろうとしていたのを、エジプトが許さず、遠回りさせられています。エジプトの要求は、ヨルダンからシリアへ、シリアのラタキア港から地中海を経てエジプトのエルアリシュ港に上陸させ、そこからラファのガザ国境への道をたどらせました。

この「ヴィヴァ パレスチナ コンボイ」は、英国の国会議員、ジョージ・ガロウェイがリーダーの一人で、こうした「フリーダム マーチ」や「ヴィヴァ パレスチナ コンボイ」には、イスラエル内のユダヤ人平和団体も共同しています。イスラエルとエジプトの妨害で、ガザに入れず、１月５日にはエジプトからガザへと入国を要求した数千人が抗議行動へと膨らみました。

こうした中で、ラファ国境で発砲騒乱が起こり、エジプト兵が一人殺されました。連帯を求める国際的な各国の人々やパレスチナ人の平和抗議デモに対して、エジプト側が規制したことで混乱した中で、銃撃戦が起こったということらしい。つまり、１月４日に、「ヴィヴァ パレスチナ コンボイ」の約２００台のトラックのうち、１３９台をラファ国境通関から許し、他の５９台はイスラエル経由で行くよう指示したために、すべてイスラエル経由でなく許可するよう求めて、抗議が拡大したらしい。

そして、この後、１月８日には、英国会議員のジョージ・ガロウェイは、「好ましからざる人物」として、エジプト当局に拘束され、英国に強制送還されました。激しい抗議とガザへの熱い連帯、日本の新聞には出ていないのですが、ネット記事で伝えられています。

パレスチナを取り巻く国際関係は、ネタニヤフ政権によって悪化の一途をたどり、オバマ政権のイスラエル寄りも明らかで、進展はありません。でも、変革の希望のアクションは、政権ではなく人々の連帯行動によって育っています。こうした人々の連帯が国を動かし、世論もまた動かしていく時代です。

日本もそうです。知らずに任せていたら、自分たちの命まで危うくなっているのは、パレスチナでなく日本です。変革の闘いは、沖縄とまたパレスチナをつないでいくようです。今日は初雪とのこと。仙台の冬、病気の丸岡さんは元気だろうか。

１月２０日　追記

今日診察がありました。順調に腫瘍マーカーの数値が改善しているとばかり思っていたら、去年ＣＥＡは１７．９にまで下がっていたのに、新年になって、また２６．６に上昇しているのを今日知りました。どうも私の癌因子は、新しい抗癌剤など刺激を受けた時にはひっこむのですが、すぐ順応して活躍するみたいです。なんか私の性向と似ているか……などと思ったり。

判決は間近。「独居より」を来月も書けるかな……と思いつつ、どんな条件でもみんなの友情と励ましの中で、元気です。大切な日本の岐路の今年を力強く歩きます。

１・３０の日比谷野音の集いの便りが何人もの友人から届きます。「沖縄」に助けられて進もう、基地も「安保」もいらない！ みんなの共同の成功を！

重信さんとの交流コーナー

もうひとつの分離壁

辻 邦

■ガザ破滅への道筋

その文書を私が読んだのは、つい最近のことだ。それは、『ミーダーン（パレスチナ・対話のための広場）』という組織が、駐日エジプト大使宛に送付した要請文である。タイトルは、『ガザ住民虐殺につながるエジプトの壁建設を止めるために』。

そこに示されていた事実は、驚くべきものだった。エジプト政府が、地下トンネルによる密輸防止と国境管理を名目に、ガザとの国境上への遮断壁建設に着手したというのだ。最初にそれを読んだときには、ガザ包囲の強化を図るイスラエルの新たな行動かと思ったほどだ。

『在英アラブ人権組織』のレポートによると、米国製の鋼鉄で作られる遮断壁は厚さ５０センチで、地表からの高さは１８メートルにも及び、完成すれば全長およそ１０キロメートル。ガザ住民の作った地下トンネルを遮断するため、地下部分の深さは何と２０～３０メートルにも達するのだという。そして昨年末に、およそ５．４キロメートルの区間の建設が着手されたというのだ。

すでにイスラエルの包囲によって、限界一歩手前にまで追い込まれているガザ地区のパレスチナ人社会は、遮断壁の完成によって決定的に崩壊するであろう。ハマースのスポークスマンもこう述べている。「この壁の建設がガザを壊滅的な状態に陥れるだろう」。

“天井なき牢獄”と呼ばれ、世界一人口密度の高いガザ。そこに暮らす１５０万人のパレスチナ人全てを死の淵に追い込もうとする、悪魔の嬌声が聞こえてくる。

■遮断壁建設を中止せよ

愕然とするのは、この遮断壁建設を強行しているのがエジプト政府だということだ。これがイスラエルの行為であれば、許し難いことではあるが「シオニストがやりそうなことだ」と妙に納得したりも出来よう。だが、それが、仮にもアラブ世界に属し、何度かイスラエルと戦火を交わしたエジプト政府の手になるものだというのだから、余計に腹立たしく、憤りも一層強まろうというものだ。

イスラエルとエジプトの厳しい封鎖の下で、ガザのパレスチナ人社会は、地下トンネルから運び込まれる物資によってかろうじて支えられてきた。まさに地下トンネルこそ、ガザの人々の命をつなぐ最後の砦なのだ。文字通りパレスチナ人の命綱であるその地下トンネルを、なぜアラブ世界の同胞たるエジプトが破壊しようとしているのか？

エジプトの独裁者・大統領ムバラクが親イスラエル・親米の姿勢であることは、これまでも指摘されてきた。一昨年１２月末から昨年１月にかけて行なわれたイスラエル軍の激しいガザ攻撃の際にも、エジプト政府はガザとの国境を閉ざし、イスラエルに虐殺されていくパレスチナ人を見殺しにした。

こうしたムバラクとエジプト政府の姿勢は、エジプトを含むアラブの民衆全般から非難されているが、ムバラクの親イスラエル・親米姿勢は微動だにしない。ノーム・チョムスキーは、２００２年5月２５日の公演の際、以下のように指摘している。

「ご存知の通り、アメリカの対外援助は、先進国の中でももっとも少ないのです。そしてその対外援助から、ある裕福な国と中程度の国に対する援助を除くと、ほとんど何も残りません。この裕福な国というのはイスラエル、中程度の国はエジプトにあたるのですが……」（『ノーム・チョムスキー』／「㈱リトル・モア」発行）

チョムスキーが正しくも指摘したように、イスラエル・エジプト両国は、米帝国主義の手厚い支援を受ける国家である。どちらの国も、米国の支持と支援なくして国家体制の維持は不可能であろう。米国が全援助を停止すればイスラエル国家は解体を免れ得ないだろうし、ムバラクの失脚も間違いない。その意味では、米国を介在してイスラエルとエジプトは明らかな共犯関係にあり、また密かな同盟者でもあるのだ。

「ムバラクよ、貴方に１５０万人のパレスチナ人を死に追いやる権利などありはしない。遮断壁の建設を即座に停止して欲しい。そして、ガザ封鎖を解いてパレスチナ人に国境を開放して欲しい。いや、そうするべきなのだ。もしも、貴方の中にひとかけらの良心が残っているのなら……」

アラブ物語(7)

リッダ闘争への道(5)

重信　房子

１０　闘いはつづく

１９７２年、５月３０日のリッダ闘争は、日本では激しい批判にさらされた。日本政府ばかりかマスコミもまたアメリカ発の色眼鏡で国際情報、国際情勢を見ていて、パレスチナの実情を理解しようともしなかった。ベイルートやカイロの特派員の送る記事は、日本の新聞社のデスクに「アラブ寄り」と見なされ、書き換えられることが常々多いことを、私も日本人会の付き合いで知っていた。連合赤軍事件の衝撃の延長上で、日本のマスコミはリッダ闘争の暴力を論じていた。そのため、シオニストの傘下の欧米マスコミは、日本発の「連赤事件」とリッダ闘争を結びつけて、パレスチナを非難した。

その中で、日本では、国際情勢に明るいべ平連系の「文化人」たちや戸村一作三里塚反対同盟委員長らが連名で、交戦下のパレスチナ解放の闘いであり、支持すると表明した。

しかし、左翼は、獄中の赤軍派すら沈黙と批判の声があるという。国内の左翼の反応は私には意外であった。闘えば必ず友人たちは支持すると思い込んでいたし、また、連合赤軍事件を吹き飛ばすような国際主義の闘いと思い込んでいたので、その反応は私を驚かせた。私にはかなりの衝撃であった。しかし、この反応に示されたように、アラブの情況に埋没していた私にとって、日本との落差を知り、埋める方法を模索するゆとりも精神的余裕もなかった。

アラブの現実の側から、日本に理解を求めようとした。そして、国内に「国際主義について」の一文を送った。日本は「左翼」によっても国境の壁が高くなっていると批判した。そして、リッダ闘争への左翼の評価がレーニンの国際主義を貫いたツインメルワルド左派と他を分かつものだと主張した。以来、国内とのかかわりは、闘い続けることによって、左翼に限らず日本の中で支持する人々と出合っていこう、そんな思いだった。

交流のあった日本の中のＶＺ５８ばかりか、「赤軍―ＰＦＬＰ世界戦争宣言」を上映していた若松プロも、人民新聞も、すでに弾圧捜索にさらされつつ、抗議し、権力に対峙しながら支えてくれた。少したって、「連赤」で崩壊していた赤軍派の中から、赤軍派の大菩薩峠事件で保釈されたＵさんらが、「あれは世界赤軍の闘いだ」と盛んに支持を訴えた。また、中核派の救対がリッダ闘争戦士に同情し、イスラエルにおける岡本の軍事法廷への庄司弁護士の出発を支援した。

そうした中で、Ｕさんや京大同学会を中心にして、１９７２年の大文字焼きの８月１６日、京大で、リッダ闘争戦士追悼の集会を開くことに決めた。３人の戦士のうち２人が京大生であったことも作用したと思う。彼らは、実行委員会を結成し、「８・１６ パレスチナインドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会」を行った。

集会実行委員会は、この８・１６集会について次のように述べている。

「三人の戦士が我々に言葉を残した。

『我々は戦争に赴く、絶対に葬列をくり出すな。ただ、祭りを。我々と世界革命の友人たちの為に。』

全共闘運動の中からパルチザン軍団を先頭に旅立った戦士の群と赤軍派を頂点とした革命の軍事形成への長征の出発。これら革命戦争派の最も突出した質を断固として継承せんとする赤い血によって結ばれた義兄弟達の集い。8・16パレスチナ人民・インドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会は京都大学法経一番の大教室を満場の熱気で埋めて開催された。

奥平・安田二戦士、そしてイスラエルの爆弾テロルに倒れた・ＰＦＬＰ中央委員・政治局広報担当員ガッサン・カナファー二を、そして既に戦い半ばに倒れた多くの日本の、世界の革命戦士への黙悼、そして『同志は斃れぬ』の合唱。後につづく義兄弟達の決意と厳粛さに溢れた黙悼と合唱は入場の際チェックされている報道関係者達にも自発的な起立を促す。～」と報告している。(「序章」９号三戦士追悼特集「デイル・ヤシン作戦」と世界革命)

そして、赤軍派代表、相模原の米軍戦車輸送阻止闘争の現場から、岡本さんの鹿児島大学の友人から、奥平・安田さんの友人たちから、イスラエル入国を阻止された庄司弁護士から、釜ヶ崎の労働者からなど、闘争現場を中心に多くの発言があったことを伝えている。

獄中からは、檜森孝雄、永山則夫らから。

また、アルジェからアラブ赤軍の声明が、そしてＰＦＬＰ、ＰＬＯの各代表のメッセージが読み上げられた。さらに、訪日していたパレスチナ解放戦士のテープによる連帯アピール、リッダ戦士の実弟や、両戦士と共に闘った京大の友人の決意表明など。「今回の闘いは、帝国主義とシオニズムに対する正当な反撃であり、この闘いを断固として支持し、連帯して進撃する」という連帯の挨拶が続いた。

「集会終了八時五分前。実行委員長は『戦士の魂が今夜の大文字によって送られるのではない。幻野を照らし出す大文字とともにオリオンの三ッ星となって我々の戦いを見つめているだろう』と締めくくった。」と報告している。(同上)

この８・１６集会にＰＬＯはアラファト議長の名において、メッセージを送った。それは以下である。

★追悼集会へのメッセージ――パレスチナ解放機構

同志のみなさん、友人のみなさん、

日本のパレスチナ人民支援センターの方々が、八月十六日京都において、テル・アヴィヴで戦死した故二同志のための追悼集会が開催されることを知らせてくれました。

私は、ＰＬＯ（パレスチナ解放機構）を代表して、故二同志の死に深い哀悼の意を表明するとともに、集会参加者ならびにすべての日本人民に対して、われわれが最終的な勝利の日まで日本人民とともに闘い続けることを明らかにするものです。

三名の日本人同志たちによるシオニスト・イスラエルに対する革命的攻撃は、パレスチナ人民およびアラブ人民によって完全に支持されており、また両人民はアメリカ帝国主義、シオニスト・イスラエル、そしてアラブ反動勢力に対する闘争をいっそう鼓舞されています。三名の日本の同志たちは、アメリカ帝国主義とシオニスト・イスラエルがパレスチナ革命を絞殺しようと策動を強化している情況にもかかわらずパレスチナ人民の来るべき勝利への確信を強固にしたのです。

同志のみなさん、友人のみなさん、

われわれの革命は、帝国主義、新旧の植民地主義および反動勢力に反対する世界革命総体の一部分です。パレスチナ人民は、アメリカ帝国主義と日本帝国主義に反対する日本人民の闘争を全面的に支持しています。日本帝国主義は自衛隊増強を中止し、沖縄派兵をとり止めるべきです。このような日本の支配階級の態度は中国、朝鮮、ヴェトナム人民、そして世界の全ての革命勢力に敵対している、とわれわれは考えています。

親愛なる日本のみなさん、

われわれが入手した情報によれば、シオニストはわが岡本公三同志に対し、パレスチナ人民に行なったのと同じ拷問と加えました。そして、軍事法廷は終身刑を宣告し、同時にシオニストたちは、パレスチナ人民迫害の事実を陰蔽しつつ、この判決が「ユダヤ人の寛容」なるものを示している、と世界に宣伝しています。その一方で、シオニストたちは、故ガッサン・カナファー二同志をはじめとしてパレスチナ革命の指導者たちをあらゆる手段を講じて暗殺しようとしているのです。現在のイスラエルのこうした策動に対して、ＰＬＯ革命勢力は革命的報復を実現する用意のあることを明らかにしておきます。

最後に、パレスチナ革命とパレスチナ人民は日本人民との連帯をいっそう促進することを希望しています。私は、日本の人民、ことに東京の支援センターの方々が継続的な物質援助をして下さっていることに対し、心からの感謝の意を表明するとともに、支援運動の拡大を希望するものです。そしてまた、われわれは、世界革命と一致する日本人民の闘争に対するわれわれの義務を遂行する用意があります。

どうか、われわれの友情を連帯の挨拶をお受け下さい。

故奥平・安田両同志哀悼!

パレスチナ革命万歳!

パレスチナの民主主義国家万歳!

日本人民とパレスチナ人民との連帯万歳!

ＰＬＯ議長、常任司令委員会幹部

ヤセル・アラファト

また、ＰＦＬＰも次のようなメッセージを送っている。

★遺悼集会への挨拶――――パレスチナ解放人民戦線

親愛なる日本の同志のみなさん、

世界革命へのコミットメントの表現としてパレスチナ人民のために殉教した同志たち、すなわち奥平(バーシム)、安田（サラーハ）を追悼する京都集会をあなた方がとり行なっているこの歴史的機会に際して、私は、ＰＦＬＰの名において、あなた方に戦闘的な挨拶を送るものです。

親愛なる同志のみなさん

われわれは帝国主義・世界シオニズムやアラブ反動といった反動的・ファッショ的な付属物一切を伴うに対する闘争の単一性のみならず運命の統一性によっても相互に結びつけられています。この同志的な紐帯に加えて、一九七二年五月三十日のリッダ空港における

「デイル・ヤシン作戦」での奥平・安田同志の殉教とともに一層の強化がもたらされました。彼らの殉教は、プロレタリア国際主義の崇高な理想、つまり全世界で解放と社会主義をめざして闘っている革命家を結び付ける理想を強調し、強化するに至りました。

二名の殉教死者の血は、人民武装闘争の道程を導き、世界革命の革命的分遣隊の統合を更に推進し、強化する方向にわれわれを導く烽火となるでしょう。

われわれは、あなたがたの光栄ある集会に参加できないことを極めて残念に思います。しかしながらわれわれは、このメッセージを通じて、日本の大衆および革命的勢力に対し、ＰＦＬＰの全てのメンバーが二名の英雄的殉教者に対して抱いている深い愛情と尊敬の念を保証するものです。われわれは、これらの殉教した英雄を産み出し、また、彼らの殉教を追悼し、これら二戦士の崇高な革命的動機にケチをつけようとした帝国主義的・資本主義的・排外主義的プロパガンダを非難して立ち上がっている日本の大衆に対し大いなる賞讃の辞を呈するものです。

ＰＦＬＰの内部においてわれわれは、わが戦士たちと日本の闘士とを結び付ける一連の殉教を誇りに思っています。われわれは、囚われの闘士、岡本同志を誇りに思っています。

これらの三名の同志および進歩的な日本の大衆に対するわれわれの態度を表明するのに、全世界のあらゆる革命勢力、とりわけ帝国主義とその反動的・ファッショ的従属物に対して大打撃を加えているインドシナの英雄的人民の前にわれわれの誓いを新たにすること以上によいものはありません。

抑圧された塘級および人民の勝利が達成され、そして人間による人間の収奪がこの世界から根絶されるまで、われわれはいかなる犠牲をも物ともせず闘争を推進することを明らかにします。

われわれはこの場を借りて、戦闘的な英雄たち――帝国主義的・資本主義的なデマゴギーに断乎として対抗している――が活動していた京都大学における革命的運動に敬意を表したい。京都大学の学生たちが帝国主義的・反動的・ブルジョア的プロパガンダを完全に拒否することの表現として奥平・安田同志の写真を大学の門（時計塔）に高々と掲げたことを、われわれは常に想い起こすでしょう。

親愛な同志のみなさん、

われわれの共通した闘争の遺程は、いかなる困難があろうとも、革命家たちの決意とともに進むことを確信していただきたい。われわれは、わが殉教者たちの血によってこの道程の渇きをいやし続けるのです。先月のガッサン・カナファーニ同志、そしてガザにおける指導的同志の一人であったアーマド・オムラン同志の殉教はわれわれの闘いを続ける決意を示す例でしかないのです。

世界の革命勢力の間の同志的プロレタリア国際主義万歳、

抑圧された階級ならびに人民の闘争万歳、

インド・シナ人民の解放闘争に勝利を、

人類の敵に死を、

革命闘争の殉教者に栄光あれ。

この１９７２年の集会の後に、いつからか高瀬泰司さんら京大パルチの友人たちの手で、京大西部講堂の屋根にオリオンの三ッ星が描かれた。彼らリッダ三戦士の国際連帯を不滅の輝きとするために。そして、また京大の若い世代が先輩の一つの闘いを考える機会になるようにと。

一方、アラブでは、７月１０日岡本軍事法廷のはじまる日、虐殺されたガッサン・カナファーニの人民葬が行われた。葬列はベイルート シャティーラキャンプを出発し、キャンプを巡り、ベイルートの街を進んだ。パレスチナ遊撃隊の音楽隊を先頭にして、葬列は反イスラエル シオニストのデモとなって続いた。パレスチナ国旗に包まれたガッサン・カナファーニの棺、花輪に埋もれたガッサンの写真と共に、バーシム奥平、サラーハ安田、そしてアハマッド岡本の写真が掲げられた。パレスチナ、レバノン人民の葬式デモははるかに４万人を超えていたという。葬列は、歌、音楽、シュプレヒコール、踊りとなって、人々を鼓舞し、闘いへの決意の場に変わっていく。２時間ほどの葬列の行進の後、シャティーラキャンプのはずれにある墓地に、ガッサンの棺は埋められた。棺を地に還す時、花びらが雨のように降りそそぎ、肩車されたガッサンの子どもたちがＶサインを掲げると、合図のように拳が上がり、クラシンコーフが空に向かって連続的に弔砲のように撃ち放たれたという。

「今日の葬式は、また、バーシム、サラーハの弔いでもある。彼らは我らの地、パレスチナのどこかに埋められた。解放された祖国に戻ったら、必ず、シオニストが埋めた所から彼らを探し出して、英雄戦士の墓に、パレスチナの兄弟として埋葬するつもりだ」ハバシュがそう語った。

後に松林の一角にバーシム奥平とサラーハ安田の墓が作られた。もちろんそこに彼ら二人の遺骨はない。

しかし、墓石に刻まれた文字に、彼らがパレスチナの戦士たちの一人として、１９７２年５月３０日に殉教したことが記されている。

後に２００２年３月３０日、日比谷公園の一角の桜吹雪の下で、パレスチナの土地の日に連帯して自決したユセフ檜森の遺灰もそこに加えられた。パレスチナの闘いはそうした無数の人民・戦士・リーダーたちの使命と犠牲と祖国愛の生命の歴史上に築かれてきた。そして、今も、占領されたパレスチナ解放を求めて闘いは続いている。

PFLPとの矛盾―73年ドバイ闘争の時代(1)

１、早すぎた登場

１９７２年リッダ闘争を経て、ＰＦＬＰの指揮下「ジャパニーズ・レッド・アーミー」はアラブ・アフリカ・ラテンアメリカの世界の解放勢力や、欧州の急進的な革命潮流の間で、「国際主義のシンボル」として賞賛に浴していた。

しかし、その一方で、この時期未経験なことの連続で、私にとっては最も困難な時代であった。この時代の様々な経験を通して、私はアラブで生き闘う方法と覚悟を身に付けたと思う。

当時の仲間は、リッダ闘争を闘った仲間たちと、有形無形に革命の志を共にした、片手で数えるほどの者たちであった。リッダ闘争後、当初はＰＦＬＰの作戦に無名のアジア人か日本人が加わったとして話題となるであろうが、私たちはその間は沈黙を貫くことになっていた。ＰＦＬＰの作戦はそのように準備されていた。その成り行きを踏まえて、私たちはゆっくりと自分たちのあり方を設計していくつもりであった。

リッダ闘争の戦士たちは、ＰＦＬＰの戦士として退路を絶ち、闘い、自決する決意をしていた。その後、たとえば、リッダ闘争の戦士たちが「よど号グループの岡本の弟」だとか、私の「偽装結婚の夫」だったとか、何を言われても沈黙するつもりだった。「ＰＦＬＰの闘い」として公表され、日本人の発言は、「ノーコメント」のはずだった。それに、物質的にも組織的にもまだ何の準備もなかった。みんな集まった最後の別れの宴の時に、今後彼らの意志を継いで闘うにあたって、結社のイメージがいいとか、名称は「紅孔雀」はどうかなどと、明るい気分で、リッダ闘争前の仲間たちと話したことはあったが、組織というのはこれから考えようというレベルに過ぎなかった。

ところが、ＰＦＬＰの兵士として、無名に闘うはずだったパトリック・アルグレロ隊は、アハマッド岡本によって、「我々はＰＦＬＰと共に闘う日本人の赤軍兵士である」と宣言された。その現実に立って、ＰＦＬＰの当時のスポークスマンであり、情報センターの責任者であるガッサン・カナファーニの指示で、岡本を援護射撃すべく、英文の「赤軍声明」を発した。そして、リッダ闘争の作戦に参加した赤軍兵士の立場を表明した。

赤軍からの宣言

（リッダ闘争の声明　一九七二年五月三〇日）

一、われわれ赤軍は、ＰＦＬＰ（パレスチナ解放人民戦線）の同志とともに、共通の敵に対して成功裏に行われた攻撃的闘争のニュースを享受できて幸福である。われわれはこの作戦を誇りとする完全な権利を持つ。

一、敵は、全世界にいつわりの情報をまき散らし、わが革命的攻撃の衝撃をけんめいに低めようと努めている。彼らがいかに、＜ヒューマニズム＞の名に於いて自己を正当化しようとしても、われわれは彼らが１９４８年４月９日から１０日、ディール・ヤシン村で何をしたか、１９５６年１０月２０日、パレスチナのカフル・カシム村で何をしたかを思い出すだけである。彼らが＜ヒューマニズム＞について叫べば叫ぶほどわれわれ戦う人民は自らの長い虐げられた歴史を、ますます鮮明に思い出す。

一、虐げられた者の語ることばは、銃以外になく、虐げられた者が心に抱くヒューマニズムは、武装闘争以外にない。ベトナム、パレスチナの同志たちが、帝国主義者の世界分割によって作られた国境を突き破って日夜任務を果たしているのと同じ方法でわれわれも戦い続け、闘争を強化する。

一、真の団結は、先進国ならびに第三世界の人民の共同武装闘争を通じて、また共通の敵を打倒する過程を通じてのみ達成される。

一、三人のゲリラ戦士は、具体的かつ効果的な実行と、犠牲の上に立つ、われわれの革命に永遠の火をともすために、喜々として攻撃におもむいた。われわれもやる。全世界にわたる彼らと同質の闘争を拡大しよう。

一、パレスチナの虐げられた友よ、この闘争は、日本帝国主義者の黒い血にまみれた手で育った日本人民が武器を置くことなくあなた方に手をさしのべ、抱擁し、歩き続けていることを証明した。それをわれわれは誇りに思う。

一、われわれは宣言する。「われわれはパレスチナの友人ならびにＰＦＬＰの同志と手を取り、世界の全ての

敵を打倒するまで前進する用意がある」ことを。
一、勝利の日まで、日本に住む朝鮮、中国人民に、さらに日本の中の第三世界を強制された沖縄人民と共通の敵の打倒において、われわれと共にある全世界の友よ、われわれは互いに会うことはないけれども灯をともすプロレタリア国際主義があらゆる戦線ならびに戦場を統一し、ひとつの敵をたたきつぶすことを、確信をもって告げる。世界革命までともに歩もう。
一、日本の同志よ、友よ。愛する三人の同志の闘争を前進させ、既成の国境を打ち砕き虐げられた者の心はひとつであることを胸にしつつ、より大胆に進もう。
一、三人の同志の最後の言葉は次のようであった。「われわれは絶対に失敗しない。歴史の中の無名戦士としてどこでも死ぬ用意がある。いざ友よ、家族よ、葬式をせずにお祝いをせよ！」（以上は、マスコミで翻訳された赤軍声明である。「ディール・ヤシン村で何をしたか」の一節が抜けているので補った。）

当時、岡本軍事法廷と時を同じくして、「ノイマン事件」がやはりイスラエルの軍事法廷で裁かれていた。１９歳のユダヤ人青年ジオラ・ノイマンが、イスラエル軍の徴兵検査で、国家と軍に忠誠を誓うのを拒否したという事件であった。そのため起訴されたのだった。

ノイマンは「イスラエル国防軍は占領軍隊であり、六日戦争で獲得した占領地域、特にガザ地区において、住民を迫害している」と、忠誠を誓うことができない理由を述べて、イスラエル国家政策を告発した。彼はヤッファ軍事法廷で、６ヵ月の刑を受けた。

こうした姿に見られるように、当時は、解放運動を全面的に支持する多くの社会主義国、非同盟諸国の反帝の公平な正義を求める中にあって、イスラエルにも共産党や平和運動の強い流れがあった。また、イスラエルの武装グループ「レッドフロント」もあった。「レッドフロント」は、欧州の６８年の反戦闘争の流れを受けたグループと言われていた。７０年代に摘発されたが、アラブ人と共闘するユダヤ人の組織であった。

岡本裁判は、「反テロ」キャンペーンの一方で、世界の友が連帯すれば勝利の一歩となることを被占領地パレスチナにもアラブ世界、国際世界にも印象付けた。こうした時代状況の中で、私たちにはまだ何の準備もなかったが、岡本同志の正義の叫びを受けて立ち、リッダの戦士たちの闘いの地平を継承発展させねばならないと誓い合った。

帰国の途上、リッダ闘争の関係者として、名前が明らかにされて帰国を断念し、アラブに一旦戻ったニザール・丸岡、ＰＦＬＰを支援していた在欧の日本人、それにＰＦＬＰのボランティア仲間に私。それが残された「戦力」だった。仲間意識の人脈に過ぎないけれども、バーシムたちと共にした家族兄弟のようなとっても強い人間的絆がある。戦闘団のような心情だったに違いない。

私たちは、アハマッド岡本の赤軍宣言を受けて、「赤軍声明」を発した。そして、その直後から在アラブの赤軍として、日本に向かっては「赤軍派」と区別されるように、「アラブ赤軍」と名乗ることにした。また、国際的には日本人の赤軍として、「日本赤軍」と呼ばれていた。私たちは国内に向かっては「アラブ赤軍」、アラブや世界からは「日本赤軍」と呼ばれるという二重の名称のままにあった。

２、解放勢力への厚い支持と「キャンプ戦争」

レバノン ベイルートからシリアに向かう、ダマスカス街道から山岳地帯に入ったところに、アレイ地区がある。ここには、旧仏植民地時代の支配者たちの広大な邸宅が並ぶ。私たちが７３年４月末に行ったアレイ地区の山荘は、松、レバノン杉の大木に覆われ、下草が繁りはじめた広い敷地の小高い丘の上に建っていた。このあたり一帯は、夏になるとハイソサエティーのレバノン人が、たとえば昔の日本の軽井沢別荘地のように憩う。また、サウジアラビアやクウェート、ドバイ、バハレーンなどの中東の王族が別荘として一夏を過ごす土地でもあった。

この山荘の持ち主は、ＰＦＬＰの前身であるアラブ・ナショナリスト運動（ANM）の時代からの同志で、この地域の有力者らしかった。ANMは、後のＰＦＬＰ議長のジョージ・ハバシュやアブ・ハニたちが１９５２年に創設した汎アラブの反植民地運動である、当時のインテリ富裕層や軍人のリーダーたちが運動の中核をなしていた。

私たちの行った山荘は、ＰＦＬＰのハバシュ議長のANM時代の同志の好意で、秘密の隠れ家のように使われているらしかった。金網で囲まれた広大な敷地に入って、車でさらに坂道をなだらかな道なりに登りつめると正面玄関に出る。正面玄関の脇には、１．５メートル、２メートルと、側面に深さを記した長さ６～７メートルほどのプールがあった。玄関の周りは噴水を囲んで、バラやグラジオラスの花が植えられていた。噴水の水は止めたままにしてあって、水の落ちる小さな池は乾いていたし、脇のプールにまだ水は入ってはいなかった。冬場には、暖炉を囲んでクリスマスを過ごすこともあるらしいが、夏以外は時々しか使われていないようだった。

この家の主人は、キリスト教徒らしい。まだレバノン人が内戦に引き裂かれる前の優雅な終章の頃であったといっても良い。７３年４月のことであった。

この金持ちの山荘のことを書いたのは、長いアラブの反植民地闘争からパレスチナ解放をめざす広汎な層の人々が参加していることを示す意図がある。解放の闘いには、貧しい人も居るし、故郷を追われて難民生活を強いられているパレスチナ人も居る。同時に、また王族や民族資本家や都市ブルジュワジーも、歴史的な反帝反植民地闘争のリーダーであり、味方なのであった。（こうした条件は、後のアラファト路線の強さも、また曖昧さも育てていくことになる。）

４０年近く前の私の活動していたアラブの地は、貧富の差が極端で、中間層未形成の社会基盤であったが、貧富の間柄を越えて、闘う同志としての絆が強いのには、当初戸惑い感心したものだった。

私は、３月１日にメイを出産した後、４月にこの山荘に避難してきた。出産時に産道を切開縫合したために、その回復にかなり時間がかかった。一人前に動けず、６月になるまで産褥安静期として、医師から診察を受けながら過ごした。このまま動けず、普通に歩いたり活動したりできなくなったら困るな……。避難し、守られるばかりで、それが辛かった。生まれたばかりの吾子を抱いて、精神は高揚しつつ、時々途方にくれそうになることもあった。動けないので致し方ないのだが。

ベイルート市内で、４月１０日にイスラエルによるＰＬＯリーダーたちへの同時多発攻撃があり、市内は大混乱していた。イスラエルはこの攻撃を７２年９月のミュンヘンオリンピック事件への報復だと正当化したが、実際には関係のないファタハのトップのＰＬＯリーダーたちが３人暗殺され、パレスチナ解放組織の事務所も爆破され、他に多数の死傷者を出した。

この時攻撃されたＰＬＯの２人のリーダーが住んでいたビルは、ちょうど私がリッダ闘争直前まで住んでいた建物の真ん前にあった。私の部屋を借りる際、すでにＰＦＬＰから、その場所に誰が住んでいるか私にも知らされていた。公然活動のリーダーのためか、いつもにぎやかに車が止まっていて、こちらが目をつけられないかとひやひやした。

リッダ闘争後から、私の居た部屋に住んでいたＰＦＬＰの仲間は攻撃の際無事だったが、暗殺攻撃直後から大家と話して、そこから撤退することにしたという。

おまけに、このイスラエルの攻撃をめぐって、レバノン政府とＰＬＯの間でやり取りが続いていた。イスラエルの攻撃にレバノン軍が遭遇したのに、イスラエルテロリストを攻撃せず、傍観したらしい。レバノン軍側は、パレスチナ勢力同士の内紛と思ったので、介入しなかったのだという。しかし、有効な反撃を行わなかったことに対して、ＰＬＯやレバノン民族主義勢力が調査を要求した。この責任追及に対して、政府やキリスト教徒右派からは、ＰＬＯの武装存在がレバノンに混乱を持ち込んでいるという批判がくり返されていた。

攻撃の張本人であるイスラエルは、ＰＬＯリーダーたちを暗殺したばかりか、レバノン政府とＰＬＯの間に火種を植え付けたのだった。こうして矛盾は拡大し、レバノン政府軍によるベイルートのシャティーラパレスチナ難民キャンプへの攻撃がはじまった。

メイを出産して戻った場所は、キャンプの近くにあって、４月１０日のイスラエルの攻撃ですぐに危険地帯となってしまった。一ブロック先のＰＤＦＬＰ（パレスチナ解放民主戦線、後のＤＦＬＰ）の事務所がイスラエルの襲撃に応戦し、爆破されていた。私たちはその時に慌てて一旦キャンプ近くから空港を見下ろすドルーズのＰＦＬＰの友人宅に避難した。

さらに５月２日、レバノン軍の難民キャンプ攻撃のはじめの砲弾で、キャンプ近くの私たちの住んでいたビルがやられた。私たちは、すでに避難していたが、部屋はビルの裏側に面し、キャンプを見下ろす側にあった。レバノン軍はビルの正面の方から攻撃したので、部屋への直撃は免れた。

私たちはすでにキャンプ戦争のはじまる前に、このベイルートを見下ろす山岳地帯へと緊急避難してきた。当時はＰＦＬＰの前身であるANMの仲間がレバノン人にも多く、そうした人々に助けられて、ＰＦＬＰの兵站財政基盤もかなり豊かで、余裕もあった。

広いベランダからベイルートの町を見下ろすと、シャティーラキャンプのあたりはすぐに分かった。夜中でも、曳光弾が弧を描いて飛び交っている。レバノン軍とパレスチナ難民キャンプの戦争が夜間も続いているためである。漆黒の中、眼下に小さく広がる点々とした灯の残る町に、曳光弾が弧を描く。その美しさには、戦争でありその下で人々が殺されている現実が偽りか幻のように思えてくる。

時々、曳光弾がキャンプのあたりからとんでもない方向に飛ぶと、山荘を警護するコマンドたちは「あ、あれはDが撃った弾だ」などと、日本人ボランティアたちの名をあげて大笑いしている。彼らは戦争でも、いつも陽気だ。（つづく）

面会について

調整なしに面会に行っても、予定している面会者とぶつかれば会えないことになります。

以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。

・面会は１日につき１組（３人まで）しか許可されていません。

・面会時間は、２分ずつ伸びて、午前中は１２分、午後は１０分です。時間を有効に使う工夫が必要です。

・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。

曜日――重信さんとの関係（調整担当者）

★月曜日――明治大学の友人・知人（小川健）

★火・水曜日――一般（山本万里子）

★木・金曜日――親族と一般（大谷みどり）

＊山本万里子　TEL：090-4367-5389　E-mail： mariko481@hotmail.com

＊大谷みどり　携帯メール：midorinokeitai@docomo.ne.jp　E-mail：the-5th-element@hotmail.co.jp

＊トラブルを避けるため、重信さんには事前に面会予定日と面会者名を伝えておきます。１週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

後　記

重信さんの腫瘍マーカーの数値がまた少し上がったとのこと。担当医はなぜだか分からないとのことですが、次ぎの検査で、もう少し明確になると思われます。快方に向かうことを切に祈ります。

「アラブ物語」の「リッダ闘争への道」は前回で完結したとお知らせしましたが、「**１０、闘いは続く**」が補われました。その後に、今回から「ＰＦＬＰとの矛盾―７３年ドバイ闘争の時代」を連載してゆきます。その完結の前に最高裁の判決が出るかもしれませんが、少なくとも、この連載を終わらせるまでは「オリーブの樹」を発行しつづけます。

ハイチをすさまじい大地震が襲い、死者数はすでに１７万人に達し、２０万人にもなるだろうと言われている。これに対する日本の対応は鈍すぎないでしょうか。メディアもおとなしいし、援助活動も小規模すぎないか。地震国日本がこの惨事にやれることやるべきことは一杯あるはず。援助活動は緊急でなくてはならない。それなのに、日本がまずやるのは「調査隊」を送ってから……と、ワンテンポ遅れる。

現地を訪れた人の報告を聴いてびっくりした。日本から医師団が派遣されたにもかかわらず、そして山のような負傷者がいるにもかかわらず、日本の医者たちは手術ができない。彼らは、Ｘ線照射をして、身体のどこが骨折しているかを負傷者に知らせることだけとのこと。なぜなら、外務省の規則で、麻酔薬の持ち出しが禁じられてるからだそう。信じられない。こんな愚鈍な規則を守ることに、何のとりえがあるというのか。被災者への配慮がまったく欠けている。これが、度し難い官僚政治なのでしょう。

鳩山首相は、これまでの首相と違って、「国益」という言葉をほとんど使わず、「命を守る政治」を軸にするとその施政方針として語った。空文句でなく、さびついて旧態然とした司法の改革含めて、官僚政治を変え、本当に「命を守る政治」を実践してほしいものです。　　Ｙ

連絡先　〒105-0004　東京都港区新橋2-8-16　石田ビル４階
救援連絡センター気付　「重信房子さんを支える会」
郵便振替　00110-4-613941　オリーブの樹
銀行口座　三井住友銀行　赤羽支店　226-3687269　オリーブの樹
www.geocities.jp/setfreemarian/index.html　　頒布価格　５００円

「正誤」表

第95号

①5P右下から14行目	**団結実証→団結必勝**
②12P左上から21行目	**～要るとのデータ→いるとのデータ**
③16P左下から16行目	**抑圧された塘級→階級**